

知禮と智圓

中山正晃

當時、山外派の諸師は、師資あいついで晤恩の學説を堅持したが、なかでも源清・洪敏は、「難詞二十條」において、山家派の論説を鋭く批難した。これに對して知禮は、源清の没後、同門の善信からの屈請に應じて「釋難扶宗記」を著わし、山外派の主張を論難攻撃しているが、その中で兩派の諍論の問題點を指摘して、自己の立場を明確にしている。

一 十世紀錢氏の吳越國王の外護によつて、杭州・明州の地からようやく復興をみた天台の宗門では、趙宋時代に入つてから教學の研究がさかに行なわれた。その結果、天台宗徒のあいだには、教學的思惟の相違から自ら對峙の意識が生まれて、それが學派對抗の形勢を強めることとなつた。趙宋天台においては、知禮と智圓が前後にわたる山家山外兩派の諍論をおこしたが、兩派のあいだには教學上の諸問題をめぐつてはげしく論難がとりかわされて、その對立論争は益々激化の方向を辿るに至つた。かかる論争を契機として天台の教學は一段と洗練されたものになるのであるが、その教學の根柢となつたのは五小部の研鑽であつた。知禮と智圓はこれらの宗門教學の研究課題に對して如何なる態度をとつたか、これを山家山外の諍論を通して考察したいと思う。

二 山家山外兩派の論争の直接原因は、天台大師の「金光明玄義」廣略二本の眞偽問題にあつたといわれている。すなわち山外派の慈光志因の門人であつた晤恩は、偶々「金光明玄義發揮記」を著わして、その略本を註釋し、觀心釋のある廣本を後人の僞作とした。時に山家派の寶雲義通は、「金光明玄義贊釋」を製作して、その廣本は天台大師の眞撰であると言明している。それが兩派の論争となつて愈々對立的となつたのである。

この著において、論議の争點となつたのは、「金光明玄義」の十種三法に關する觀心釋の問題である。すなわち山外派の徒は、「金光明玄義」の教義釋に説く十種三法は、専ら眞如法性の理を明かしたものであるから、別に觀心をとらたてて解釋する必要はないと主張して、觀心釋を廢除するのであるが、これに對して山家派の知禮は、このように偏つた山外派の見解は、天台の觀法に違ひ、本義に反するものであると言つて、これを鋭く論駁し、眞正面に山外派と對決しているのである。

三 知禮と智圓がおこした山家山外の論争は、宋代の咸平三年（一〇〇〇）から景德四年（一〇〇七）にわたる七七年においてもつとも熾烈をきわめたが、この間にとりかわされた論難の往復は前後五回にも及んでいる。知禮は「十義書」において、これら諍論の大綱を提示しているのであるが、その中で彼は當時天台の宗門においてさかんに論議された教學上の個々の問題を擧げている。

まず第一は、智圓が師慶昭をたすけて「辯訛」をあらわし、「金光明玄義」の十種三法は、専ら理觀を明かしたもので、事に附して觀ずる必要はないと主張しているが、これに對して知禮は、「問疑書」において、理觀とは止觀の約行觀のことであり、それは所觀の對象を採び、十乘觀法を修すべきものであると言つて、専ら修觀の

相を説示している。

第二に、智圓は「答疑書」をあらわしているが、それによると、ただちに心性の理を顯わすことを理觀と言ひ、あるいは理觀（の觀心）と同じ意味をもつものであると主張している。これに對して知禮は、さらに「詰難書」を提示して、このような山外派の觀心に對する態度は、教をもつて觀に代えようとするもので、ただちに理觀することは容易に成就しがたいから、事を歴て理を觀する止觀の約行觀を修すべきであると反論している。

第三に、智圓は「五義書」において、託事法法の二つの觀法を引照して、この二觀は、すべての事法を心性（眞心）において觀するから、所觀の對象を立てないとの理由によつて、知禮のいう理觀の觀心を批判しているが、これに對して彼知禮は、再び「問疑書」を呈出して、これら山外派の間違つた見解を破析し、天台止觀の本義に従うべきであると論駁している。

このように山外派の智圓は、専ら心觀の内證に重點をおいて、ただちに心性を顯わす理觀の觀心を主張したのに對して、山家派の知禮は、天台止觀の觀法にもとずいて、所觀の對象をたて、修觀の相を説いていることは、それ自體が兩師の教學的立場の相異を示すものであつた。

四 以上、「十義書」にみられる宗門教學に關する知禮の批判を考察した。これによつて、論難の對象は、専ら智圓の主張に向けられて、その教學の研究課題となつた天台五小部の問題に對する論說批判はその中に收められている觀がある。

知禮は「天台觀經疏」の立場から趙宋天台における淨土教學を大成したものであるが、當時、山家山外兩派が相對立し論争する時代

において、淨土の行業に關する見解は、どのようにあらわされているかが問題である。知禮は「觀經疏妙宗鈔」において、觀經所説の十六觀法は、天台の止觀の四種三昧に相應したものであつて、それは淨土の行業として般舟三昧に相當するから、止觀の實踐と淨土の行業は、相即するものであるとし、その特約として淨土往生の可能を力説している。これに對して智圓の淨土の行業に關する見解は、「天台觀經疏」の研究においてはあらわされていないようである。

しかるに彼智圓は、當時、日本から傳來された「阿彌陀經義記」を取り上げて、阿彌陀經の實踐について述べているが、これを天台大師の眞撰の書とはせず、日本人の假託の書であるとして、これとは別に彼獨自の立場から「阿彌陀經疏」を製作している。茲において、智圓は阿彌陀經の執持名號の文を引用して、これを淨土の行業として認めているのであるが、これに關して、知禮はこの書の眞偽問題を取り上げていないようである。それは彼の教學の基盤が天台五小部の研鑽にあつたからであると思われる。

このように知禮は、「天台觀經疏」の研究において、天台の止觀の立場を固守する態度をとつたが、これによつて、趙宋天台における淨土教學の學的根據は明確となつた。ここにおいて觀經は天台の止觀の實踐を説く經典となり、天台假託の觀經疏は、その宗門に占めるべき地位が與えられた。かくて趙宋天台の淨土教は、知禮が宗門教學の研究に拂つた努力によつて、その教學が大成され、それはやがて天台宗門の實踐行として、天台彌陀教觀の實踐道場の造立をみるようになったのである。